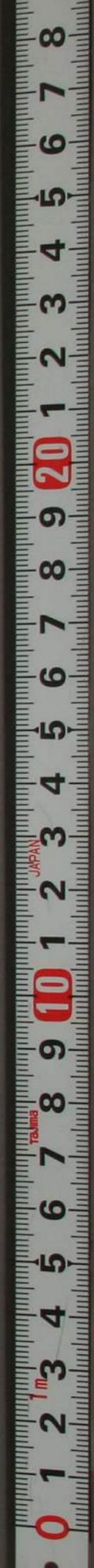


會圖託平太

二

伊 1830

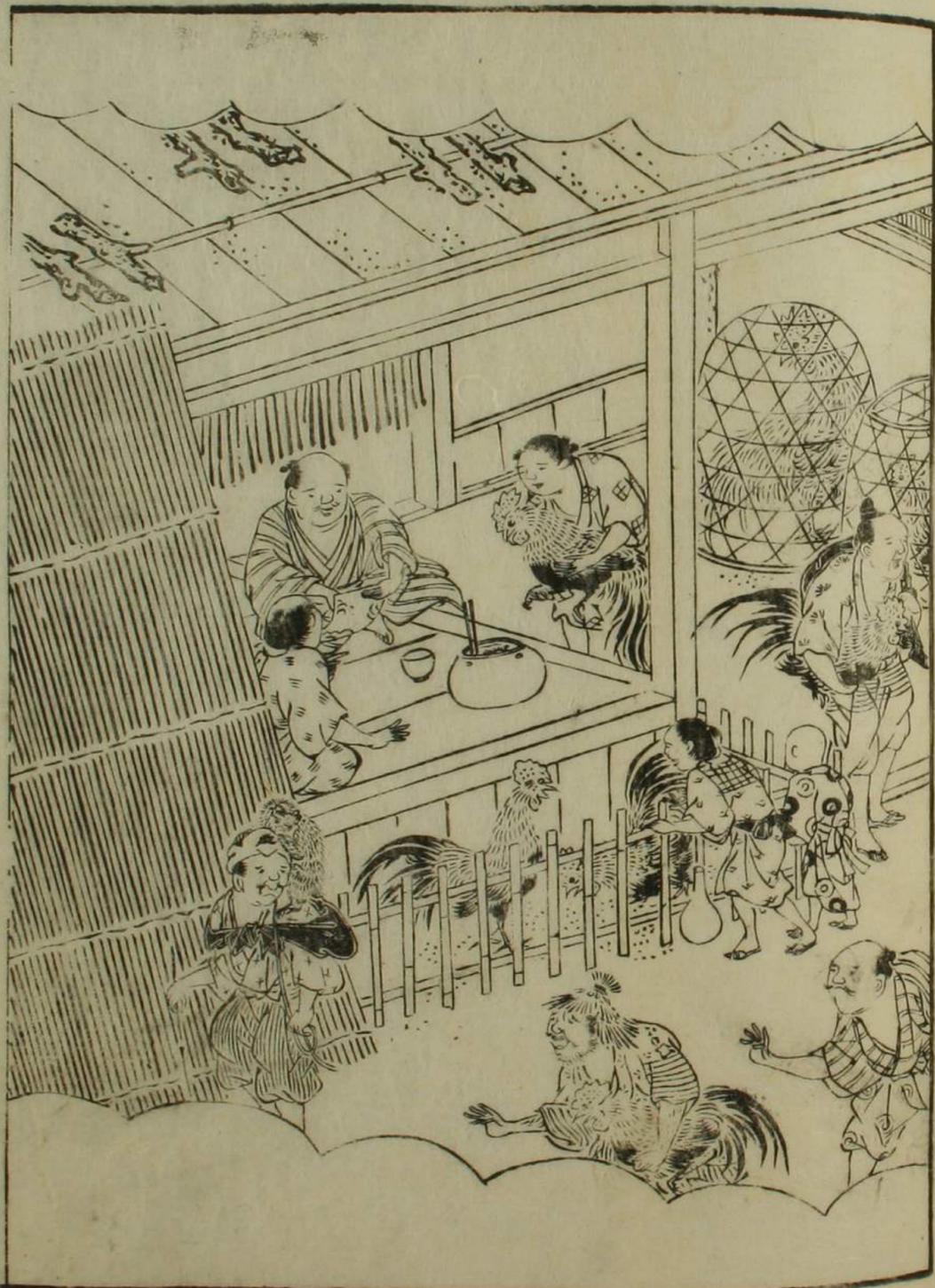


儒業と事と強ふに今又山川を平定せしむる南海の凶賊と一時に改めしむ
け強ひしむ世平く其威と治れ其徳と林いふ

治大地震彗星見弄箇雜

永平七年四月十八日大地おびく初月廿九日まぐ彗星と見ゆ時
ぬく年ぐかめりて大地震相續て徳平ぬゆと人怪んぬと伝らる
とぬくまのりて彗星毎夜あらる其光月よりも輝ゆるり天文博士
と肉へらるる言ゆとるいせらるる考すたる我わ彗星見ゆたる夏
皇極天皇の御宇に蘇我入麻呂のとれたるまぐ星あらるなり今に
はるく二度も輝ゆるるなりいけ彗にあり其光蒼とたかまほ破く玉る兵
革にるるま赤とたか凶賊起る國人安らば美らるるたか女名宮城をま白とたか
お帥と叛く二年に兵乱大に起るまとたかたの懸はく洪水江河に溢るる
まとたか此中今度の彗星其色白くまとるる二年と出づる肉に民は命令と叛

く兵革大に起る國費民若きはくいふまをた御懐とまける又其海濱中
に凶難と弄ぶる言ゆとる老老不別と真とるま二月廿九日大肉はく十歳の
凶難ありしは七八九歳のまとるまとるまとるまとるまとるまとるま
くる門くまとるに又十羽二十羽と御まはるまはるまはるまはるまはるま
くに補理く白とたかと信據はるまはるまはるまはるまはるまはるま
めぐるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるま
とる果はるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるま
務政宣ひたるは傳聞唐の王勅とるまはるまはるまはるまはるまはるま
とる筆恩甚きまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるま
この難と撤はるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるま
叙もはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるま
かく停止相觸らるる難とまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるま
かく停止相觸らるる難とまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるま



浴中の
 貴賊
 圓雞
 鶏
 鶏

雞

以

天院より承り今又法人奇物を重たげ三災と消まんに年号改元ありと
く承平と名らしむとく之を以て後之を万れ

賊將御厨三弟員官軍

鄭の言渠本孫叛逆しく其を昭とて裁に平約門送公日々に増長しく境に隣
に及んでんと企しとて連を凍死し流不融しくやその人皆猶活しく年月成
送うとてこれをも止むにわらばるく又宗院の一族を集めかきく合戦の評
定はわら平兼仁とらまわつ常陸大掾平國香の三男に貞盛の才女
に從ありかばる謀の企もわら從從に降く日列をしく居るまに
面々の多見軍勢の分謀の才女はる委細に空澄しく公の此と心推しく
懇しくうげさく作しきかりとらかきく評決事決くまうて去後兼仁も公
に疑しくまう課らると独笑しく約と早めた懐くわら其後約門にわら
洗し面々の多見勢は中より下り兼仁一人に一言のふらるる

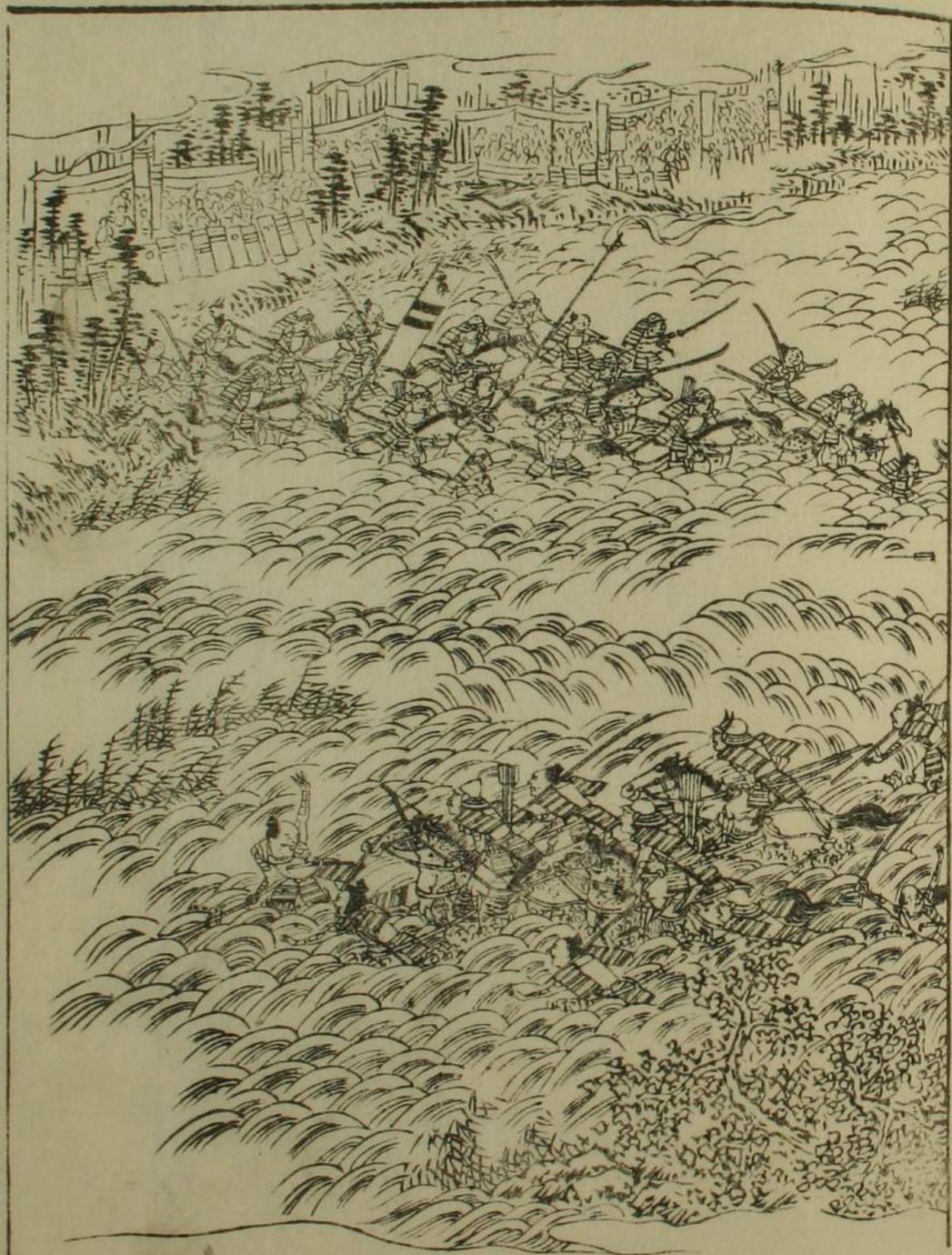
二公ありは承りより高倉に謀まきこののをせしめゆらるる其のを念くよ後悔先
次は先犯と悔るに益ありとをたもた申ゆぬ踊揚く牙と齒でぞ怒を
三程に年三兼仁の車に父の居居と浦よりわら約門に叛逆委細に語りしは
國香大に勢ありははらひあらぬ好車う我南國に住る物も親く一談の流
謀とわらうとそそと忽に其國中の強勁人民の若物家に向ひまう何の面目
うわらるるいゆらるる事の微さる中に連し退治まてとて所々の衆人を遣はれ
賊の事あるは境と隔たるも一人もあらぬ福不府中申村字志久赤芝後代
多分始り、秋合年三自餘誘長男上平を貞盛と相ま在来しく有合は
次男繁盛三男兼仁とあはれくう向ら兼仁は又百餘誘と引分と城を
三里おて出さる志久野に陣をた繁盛と懇又十町引進く勢と伏候まは款と
出援く謀はく対んとわらう志久は十一月七日約門の御厨三弟の旗の子意
あつ煙とまきまじり兼仁の軍勢志久野に陣をく射とた志久はわら

ひたり敵にたゞ出づるべしとていふにぞうたれば法軍發騎々これども
敵の僅の小勢もまばゆきとの事うあつてとて月障りま川蘇波とせせらる
兼仁の兵も楯の板と致くはく園とぞ合せるとめいあ方足野の射とて
さんぐは美軍とてあがれども故東生まの武士もあつてとていふも
さる方長刀の落とるべしとて出ださるべしとて致ひたる兼仁とて
相とて今敵の兵はれん時分たどとてお園の大敵とてし東とて
て引退く厨おれ務にまゝとて追とて二十餘町法陣とて一板一盤の勢八百
倍誘ふに分風の愛まらざとて何時とていふとていふお園のどとて
に退るは一人も退らざとてとてさる方長刀の落とるべしとていふも
盤の計は溜とて法卒さんぐは厨の兵とて引退はまもや命とていふ
投りと逃げ向ふの處より兼仁の兵陣とてさんぐはにたてかるとていふも
場の子とていふとて十方逃とていふとていふとて長退とていふとていふとて
前一二三

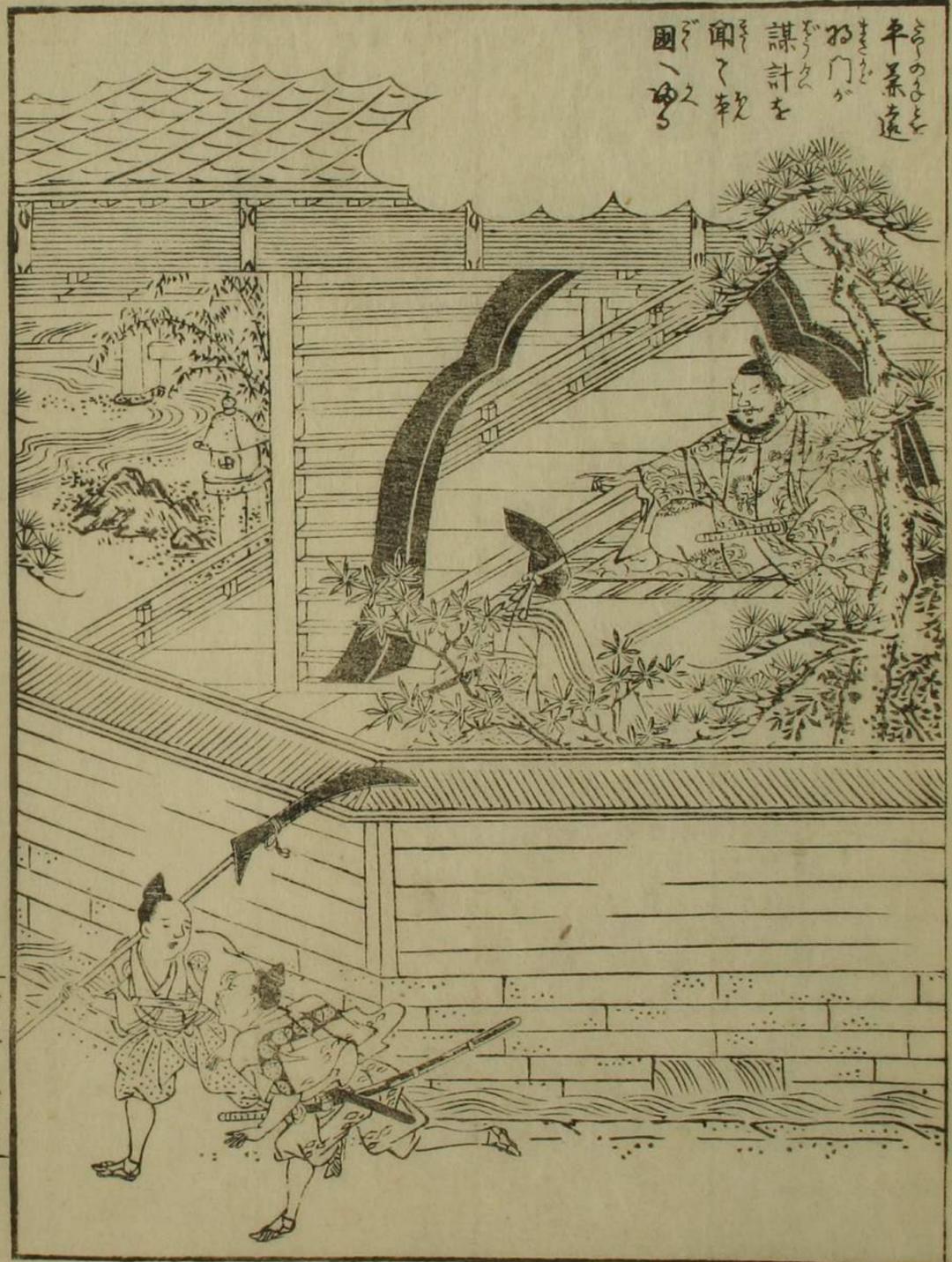
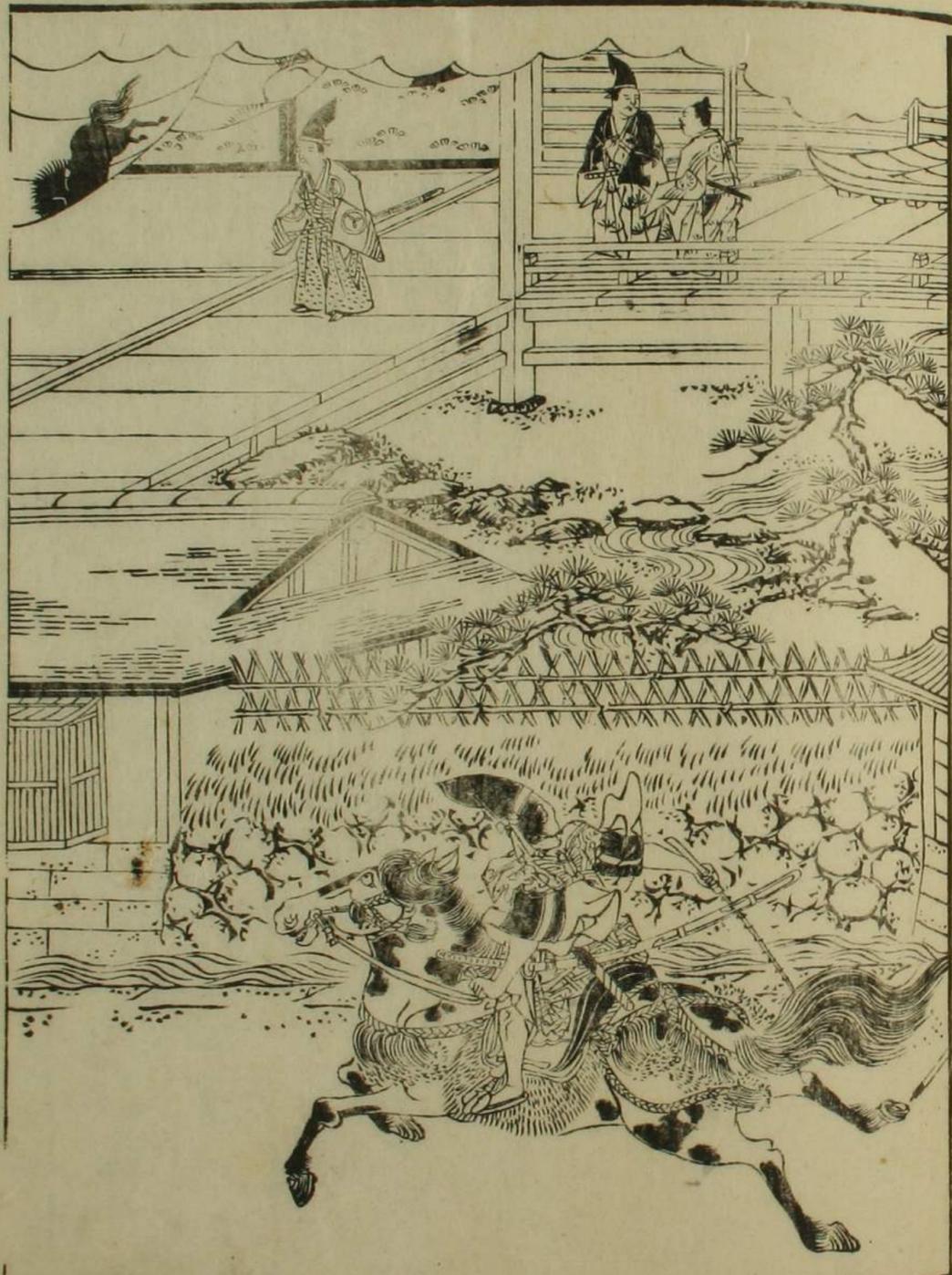
ませくと浦坂とていふとていふとて

お門發向藤代川合戦

斯く所厨二并お頼も合の軍にお肩てああ一期の利を失ひてお地とて面
圓とていふとていふとて止とて勢居るお門使者をいふとていふとて
困成敵とていふとていふとて合戦の傍負はけとていふとて其雄雄幾度も有とていふ
今この合戦は味方の利なりとていふとていふとていふとていふとて
んをのびとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
孟明視西を衝向し丙をとて鄭園を攻とて軍利とていふとていふとて
そこの子の罪にあつては後百里美襄叔が言は用とていふとていふとて
このの官録と復せりなり先申敵機にまば迫園の勢をとて孫雅儀に及らん手
肘月を枝とて進發せりわの面もたかたあつて敵とては拉の付を致とていふ
と要細にいひをいふとていふとていふとていふとていふとていふとて



五代河合殿
西番口御門
去に申す
ま



平茶遠
 お門が
 謀計を
 解く靴
 國へ

敵の楯の端をくぐりぬたりやかくと枝はまき打て蕨も真世が軍勢た
まうかの赤坂代川の白くろを陣さく引返はすまう房もつんがごの
の流のさ方より一面にまきくもめけりしうも信増も水中に溺死
まうまきかりまわし居る敵追うる海人とまきか急水難免はけ
まらなく無整が計ふけま三百餘騎の兵狩りまかた討まふ門を
まらなく居る真世が軍勢たまきま川下とませられたる兵
も川を堰を合くろと返たり門まき破りまき軍勢の軍兵急歩
海よりふくわ川にまきくもませたり國香の軍勢はつんがごに向
あひまきまま家のまきけ二軍にあり分捕るま家の眉目にはんと勇進
て敵たり門其目のまきにまき地地の綿の遣ま衣に赤糸織の遣の裾金物繫
く打たりと軍摺長にま下し金丸のま刀に懸のま尻鞘ひまの涙み
懸たる征ま若もに順ま村後まのまのま中極る水もま又三守有る

倭奥のまれ物に白鹿輪の鞍とませまふたりま陣頭にま出し
所まくるま澄まんまら村はま大ままはま十まのま
統まをけの自ま奇鉞まま方圓を征伐ままにま今まをま
まの所まけた路ま進るま准また倭大楳國香とまたり河叔姫の
まままは野津まままのま糸河まままやま狐抱ま剛入まのま
城身をまま火にま似たり其まわまぬま川ままま又人張ま
十又東二休ままら引返ま強まもま川まま川まま同ま下
引行國ま大まるとまをまてまひまらまひまらまらまらまら
まら國香のま表に塞まき居るまらまら門が射たるま遠二町まらまら
行國が遣の楯板はと射板ま大お國香のま子の乳の下まらまらまら
まらまら痛まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

於藤と鳴くべしと喚びて走りて平太左衛門二百餘騎に返し合せ
大勢が申一羽かけ入縦横にを通うと鳴り返して追走をせしむるを
かへ合されたるやどに長退させとてさへ追走をせしむるやどに
いづくまでも追はれぬ一人もあらず討死せしむるやどに
たうし世へ天狗の身負むひ一羽あらずとてあつたんとてあつた
師は伏兵やあつたんとてこの長退せしむるやどに

國書我記去浦落城お門者後

去程に兄弟の人の父國書とたきけり城の中にゆくやどに看病もあつても
折しもせきまはやく殊に大事のなるやどに實にぬれぬとてさへ追はれぬ
ける息の下より指目とひた言ひたるやどに我とてに齡六十にあまう船籠の
おに合頭と申老後のやどに出るにたるとは悦びたなり我にたう
と被殺すべしお教いよと機とぬり坂東のまがさぶ有と成べしとて我を泉

まどのさあ念もはぬきぬきおあまうとてお走りに向ひしやうかへもなれど
らば一人も生残らんぞとて家の子弟をよとて援助し山林にも身を流
しそとて及ばぬの下向とせしむるやどにお教とてとて我に後の體と書むべし
申大切に勝も勢もたるとてあつたやどに死に迫すやどにせきけしを
難しき事見負盛にも又遺言ありとていひせしむるやどにさこの
とのまも息も入らぬやどに忽ちとてそれゆかりありあは非悔も甲斐なしと
とていひせしむるやどに合戦無事盛のさ見のぞとてお城とて敵と結ばぬあははど
とていひせしむるやどに世の宿習とていひせしむるやどにさこのまも
とていひせしむるやどに後なる様とていひせしむるやどに我もとておあはは
おだにこのまもとていひせしむるやどに城中の勢もとていひせしむるやどに
八十騎にのこせりたり今も城を守りた敵にあらんと申しけるあははど
まがさぶのまもお換りも打敵とてお遺言のぞとて勢と結ぶとて敵にもあつた



ヤ美我身の上にならぬとほ叫び私財難具とお運ひを弱街より迷ふ楚の
頂羽奈公及僅国へ入れたるをば南國の國司いふ事故聞いふせんと周章は
かゝるに十九日の書程に勅使下向とのりたより國司より東國の叛亂傳聞に違
し南國に府状を賜て追討せよとの勅使にくだあんと依にわあひに
帽子と懸蓋よとくだりたる勅使をてく國司の館へ入り其の指し置ける
親より上心とて人へ衣冠の下に後をてまゝ客殿の上をに座とて
座にまゝ二三百歩をりて上列に事の件あやしくさひさう國司出され
に指し置ける勅使の件も亦今度平親王もさへ居りて南國の南進交の
所は國々の兵振るるに定集し其勢も亦夜のでく在る所の民をいひ
まぐ兼食壺おれしく親王の師を遣ふこと此日南國の府に兵隊を
し將國司今に及ぶまゝの不系とて南國の南進交の所は國々の兵振るるに
らば軍兵とて向て津波をたよりまゝあゝとて南國の南進交の所は國々の兵振るるに

前二ノ下

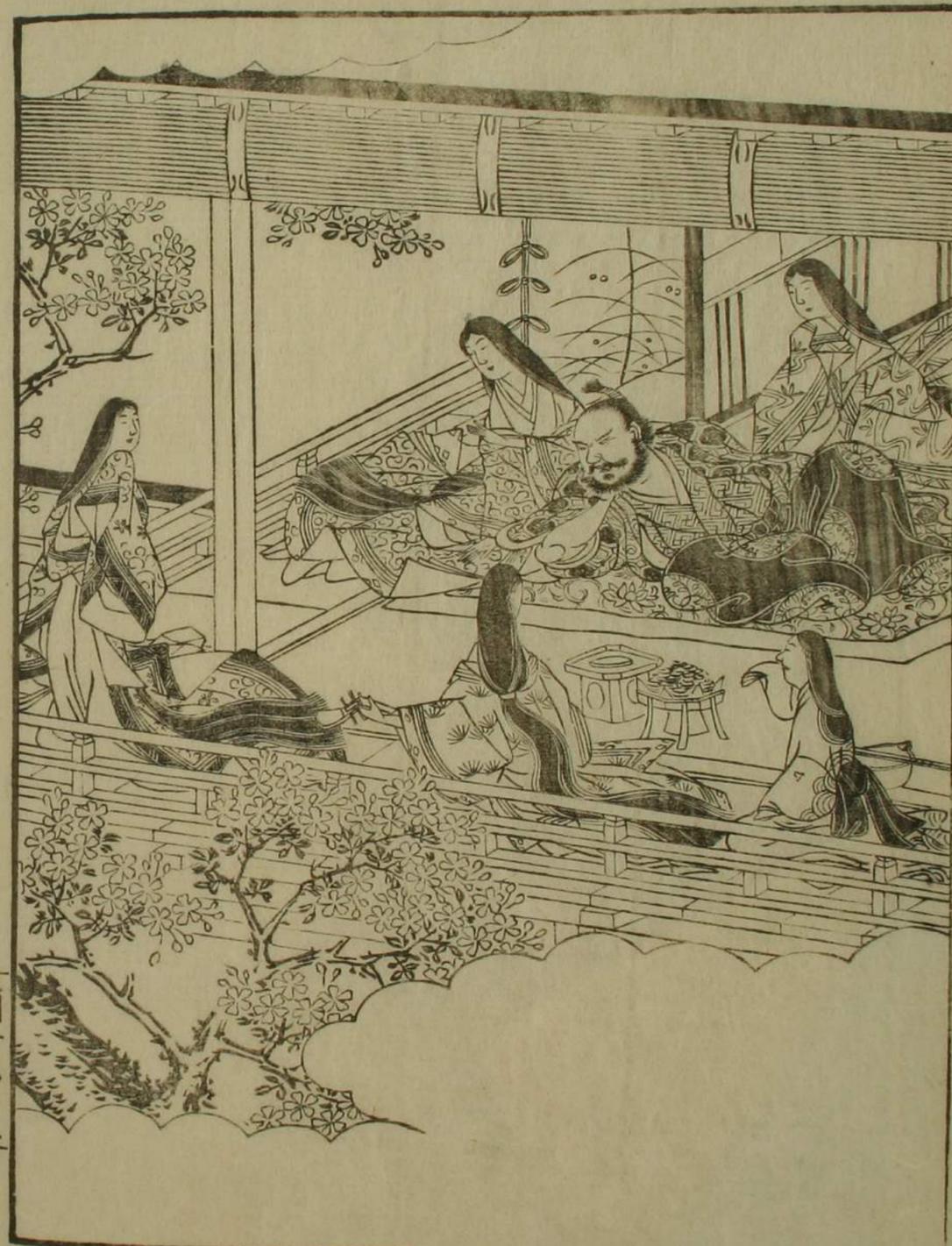
たうたる國司自とてさひさうとて南國の南進交の所は國々の兵振るるに
とらたれは國司初とて車一所を其の事とて南國の南進交の所は國々の兵振るるに
ひく連系に及い今に及ぶまゝの不系とて南國の南進交の所は國々の兵振るるに
へさひさうとてさひさうとて南國の南進交の所は國々の兵振るるに
購しとてさひさうとて南國の南進交の所は國々の兵振るるに
へ入れたるをば南國の國司いふ事故聞いふせんと周章は
かゝるに十九日の書程に勅使下向とのりたより國司より東國の叛亂傳聞に違
し南國に府状を賜て追討せよとの勅使にくだあんと依にわあひに
帽子と懸蓋よとくだりたる勅使をてく國司の館へ入り其の指し置ける
親より上心とて人へ衣冠の下に後をてまゝ客殿の上をに座とて
座にまゝ二三百歩をりて上列に事の件あやしくさひさう國司出され
に指し置ける勅使の件も亦今度平親王もさへ居りて南國の南進交の
所は國々の兵振るるに定集し其勢も亦夜のでく在る所の民をいひ
まぐ兼食壺おれしく親王の師を遣ふこと此日南國の府に兵隊を
し將國司今に及ぶまゝの不系とて南國の南進交の所は國々の兵振るるに
らば軍兵とて向て津波をたよりまゝあゝとて南國の南進交の所は國々の兵振るるに

かどに被合十二萬六千條袴とを征一たるまより御門まゆらへり分懸る軍
術ハ一向と進たさるるに三枚御宴とあり入真のあまうに酒中にて酔く其目
した女と求むたあはれ何と云ふ操嫌に人々と鏡をひ取く痛みまふる酒司
我もくと人十人官を勝たす女とさるびきくもむに金襴額縁をかきし
翠華袋紅粉を帯ひたる妓女座敷あそびるは酒席を中にてちて後四指袖と
へ一類もの髪をむけ御曲進致して形勢ハ蜀山阿房の宮に三千の輝燭
あそびの郡郭旅亭の一炊に又十年の歡樂は極もかくやとさるるなり或ハ
四目の命なりとく父母の腰と引分けあふひ北頭の佐とく主婦の契をかき
さるあやうさまはたせられぬ御涙はほろろと胸を焦きし中にも襟に
こころハ上野浜田原の某の女ハ幽窓にやうらやうとさるるにさるる紅顔
御筆は雲のほろろとさるる官殿の清女なりともほろろとさるる年も二ハハ
ぬまびぢの夜廻姫小町小町にもさるるおとね分野なりたは日圓を村と

清に一人の男ありたりいふ形は返問見け女の貌と見たりんやさるる化ハ
にあくがまてさるや二年あはりの月日とさるるこれがかつといひさる
さるるすがさるるれ鬼やせは一角やあまの鬼にさるるたまたま
さるるにさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
かくらさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
の凍もさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
のやまのさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
末までさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
ありさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
顔らりも我さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるの何某もさるるの男の寂痛さるるさるるさるるさるるさるるさるる



石門園中の
 美人婦と
 あけの月夜
 遊宴
 套後
 終



前
 一
 四
 三

一〇〇〇〇月頃にもあり一六調度より徳玉村に送るき一男もせに結
げにひひ正ひの輿とやらにうまうまひく運ぶるなり其敷も北頭より
役とく兵士あましく出立する始りて流流にわたる事とせむる輿を奪ひ
女のあまひやいづくばは行車やらんと魂も身にほだはにけり居たりしが
ねんが旅館にいら輿より中たまで顔とにも揺れぬ唯秋年の橋に呵嘆
す一高魔王宮とやらん引すなりとて地とくはうり外らうりやまや
胡酒の囚と一昭若といひ一もさひやうとて奪りお門傍に居たりは
何さうこのとすかおもあふさやいなも心懸のは宴の真と借ひてとて
慰やうとて一さのいへもせられたる長引かひたて居居り

六孫王設業政将平

六孫王源経基王のいる永年の頃より武彦守と兼く南園筑国隊に
々々去月申自去浦合戦のた国音の後政せん軍勢と借した法に進

後くあひつ所は十月の末落城のり一國々も遠中より攻めあり終く
兵武平一お門を退伏せんと張りまゝ一が月廿日頃より風年守を犯すに
若使うさう々れむとて然し一陣中に思入も事の中とて親親とて
々々去月十二日二月と華原に奔る年二弟修造と引率一其國隊に押
すせ十重二十重にをせとて射の勢とせとてりたるは隊の中東西八町自水
十二町の小城とまゝあまひ海軍勢の自分も改支度も用まては
楯にまゝま面にせんとて家先にと隊の切岸の下は攻めく唯一棟に採
為さんとて進する城中にひひて用意の事とまゝは川より返り十方の
櫓よりさうつめ引つめるのさうとて射する一陣にさんだる安房上徳の勢
三百餘人射とまゝとて下流押込豊田八帯又百餘騎にさ入り二百
騎とてさ引返されども奇よ大勢とまゝはこれと事とせむる人等
衆多三日が間息とせむる改らうたる城中に毎日射とて揚とせんは射

たうきやどに一人も討まはれず毎日二百人三百人子負討死せしむる事
ありきと云はれぬ事と云ふにやけは城はひのどく攻めしむ味方討
まうりけと攻めしむ事とあるまじくある兵を擧を突くべ城に向き
べし後なる足利の擧と控屏風塗と對敵と云ふと下知しむ下河邊
の在家敷百家と抄毀く擧擧植屏風の料にぞ運せし城申にけ由法
て敵に要隘とせしむるにありしむるに足利千人敵の陣申に
とれ對敵の出来ん時足利かひは敵煙の咽んぐ度と夫を命する事
兵隊かへ縦横をそにせしむるにやけは敗れしむるにありしむるに
風烈しれ敵とぞ討まうりき月七日未刻より雲降るを風ありて
古きぞはれありしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
他ぞ煙の上とぞ居たりしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ
と供も今敵討の事敵いしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ

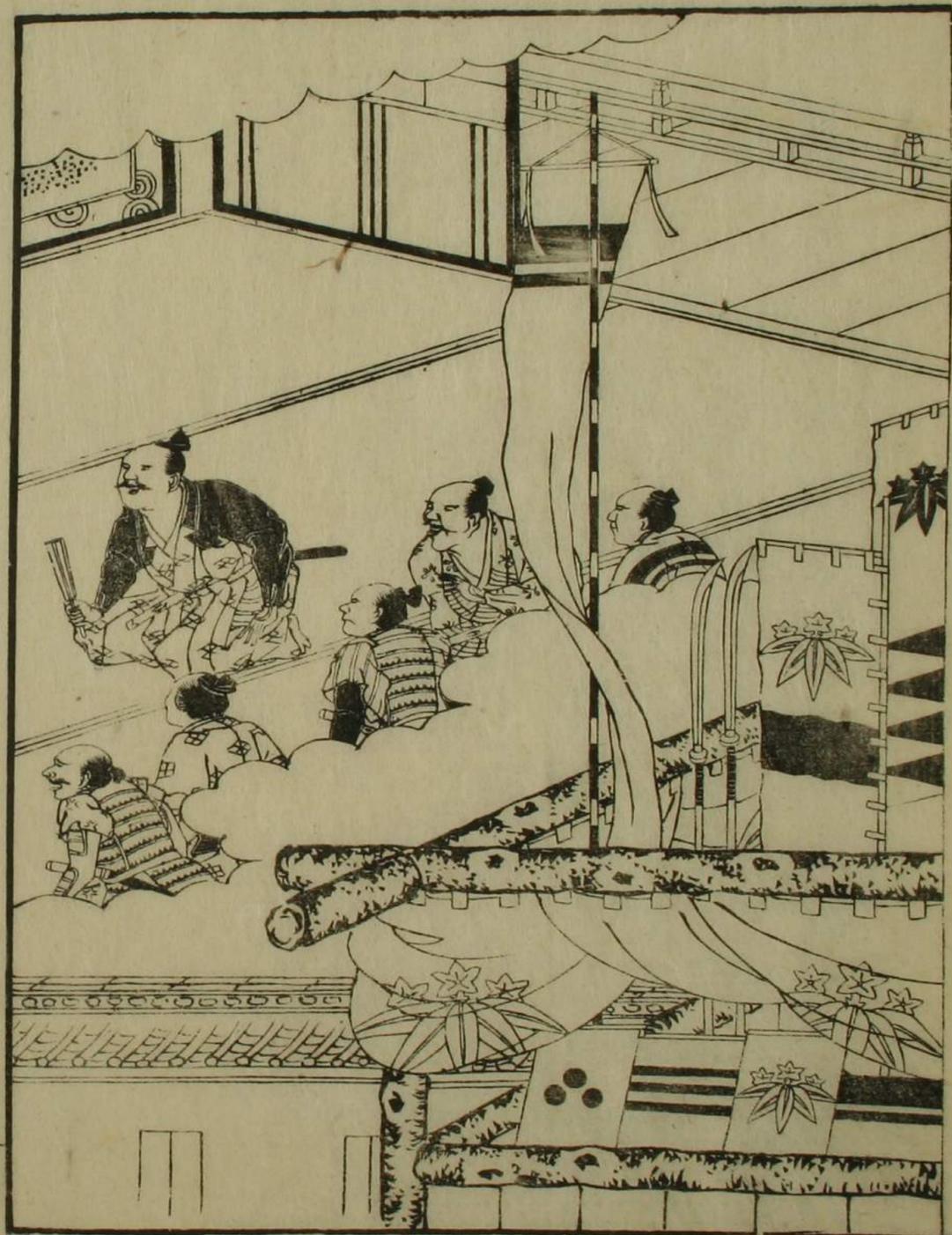
とさへいしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
大おきしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
さうりしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
所の兵二千一百八十三騎雜兵四百七十口人あり長廿二人八寸幅又すの白
布に割符とすしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
たるに果しむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
大おきしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
大お軍後基王いやく一人も誅せしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ
前にめしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
かみ捕まらしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
功の賞と辱しむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は
とやいしむるに城申の兵もさへは程一掃と云ふ兵糧は



前ノ四十七

やうく兵どもよくなく多し半箕田はこゝをたれは後基王宗徒の身後を
集めてのちまひたるをたれは間連日戦を度の大戦に味方の兵を命と惜
むるに敗れて利を損た致とことごとく戦を知ればとてもな不届もせば又
大勢とて向ふとやむ今度の大戦千にても味方の勝利ありては連日
戦にわしきまう私と戦はざるに勝つて討死しと忠我と白刃のしに勝
つるに大泉の下にせんともさう面いともさういもさうこのまじひ
なまじ加ふま先とてさくやとていよまをたぬよりさくさく返さる
りてはいれん戦のさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
おとれと申すは敵のたまきぬさたに一方と申すは美濃尾張の間に陣陣接
はるべくいりんさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
あまよのあまよさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

とてども寡を滅にたれは敵さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
子のさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
箕田は兵をく勿論にいたれは敵味方のゆ美と素もざるに所方にそのの
理ありと敵にすらの矢あり先敵の大戦に力を早業彼にせにさくさくさく
とてどもさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
たのんぐ謀をまにせはあまよこの己が武勇に勝つとてはさくさくさく
はら徳平祇に大勢ありとてども多幸恩顧の命は一人もさくさくさく
槍勢にさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
て今度さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
神いぬと醒む味方をさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
とてどもさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく



く多年の清恩は奉に敬せざんば何のよたよたぬぞんぞんといふまじき
はかけたり

箕田城合致後を記す

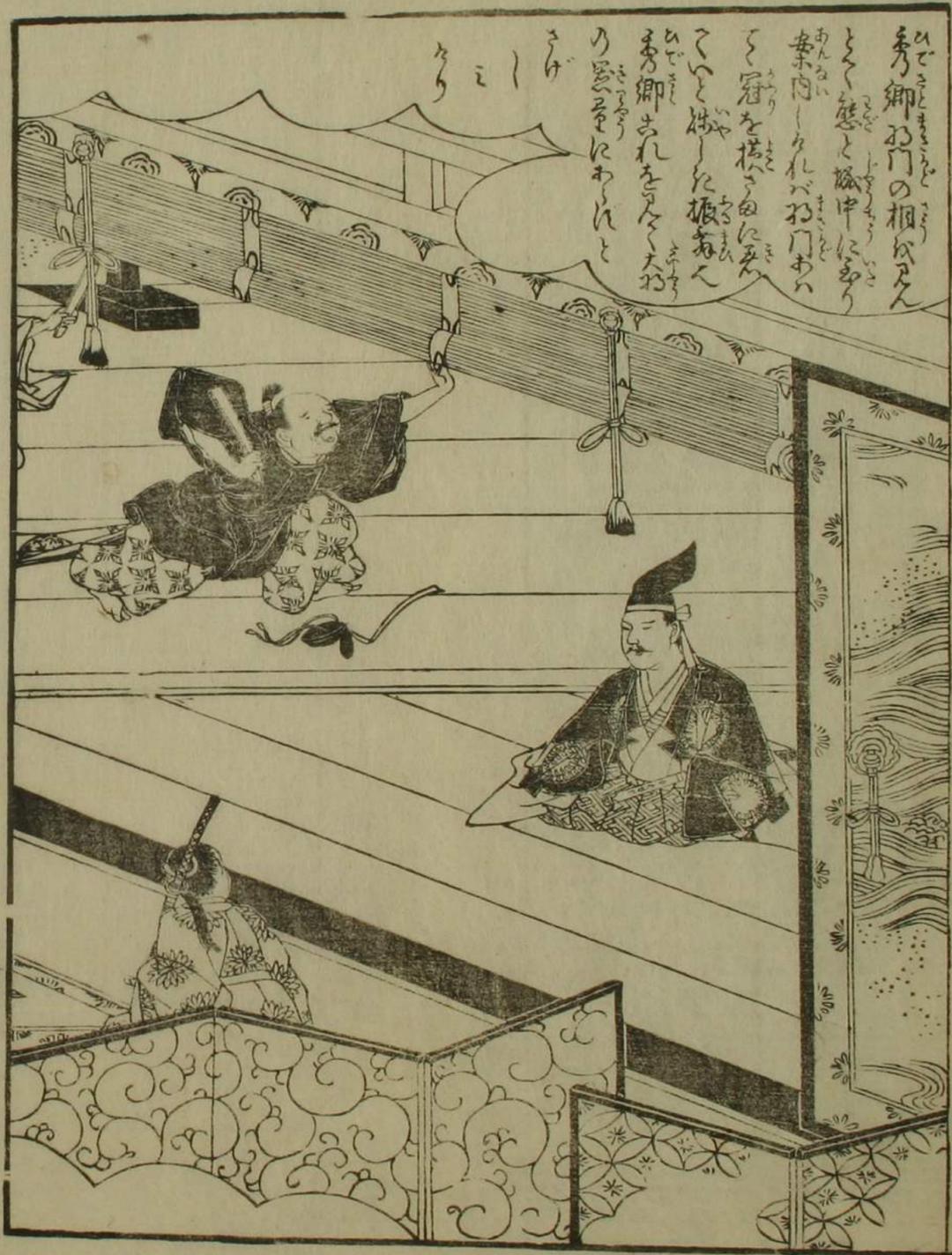
晋の郤至周と田を争ふ平ね門は月十日八系餘騎を引率し箕田城に
押寄り城の四方二里を回指麻竹葦のてく折圍をく忠天の地もくるべと
つておもむくた狐翔の翅も羽と休むと本意もく地を走る獸も身をかきまき
おもむく己の利のてめよりま令し入るる攻致南ま呼びのまに全羅
もくけ地軸も折や志ぬんとかびしりかんともつらうもされも城申也
もひるまに諸人を閉合せんがに防戦するをに城門もあきかたなくあまもあ
軍に濟方のものどもが不覺をとりしもやうとてさるるこのまはう攻んも
せに陣をきたれ役所をわきまへ城申への通洛派あり合致はことまわりを
供を城申への糧目とにまきぬく申へ今いふはたやうもまわぬは誤りよ

精力をそが中につく付死んと名ぬれもあうりうりうりか一日は
は終に例のてく秋回しり陣とるるに城申の兵ども一筋は集り我もくと甲
冑と帯しちよ鞍とさひめれたうは不慮にら其也を向て然年二月は
申に己に糧尽く今ハ飢に勝んぬ敵をせらうりうり付死んぬは
の勇に怖く敵あてて攻んもせだもくも死んぬる命一人うりも敵を討く
の所為に我をまにせんも今宵敵陣へ秋付んと企ひとて中をは
と流しと中々るへかごのてめれの勇士又をにあらべしもえびかる忠義の兵
を扶助しあてたおのりし河運時いり終ごとくかたど候ぐらうりうり
やねもあてく楚忽に討死あてりけは後分謀をめんく大ねとも安くと
とせめがごの命とも救へしりうり又方使とて梅多味方の勢の中に敵に
ある共とゆるるに苗圃の行人川城又を舟にたは終めといり一朋友の好あると
まなち彼が供しり終めが陣へ急びやうりやせしりうり夫のたはるる

つらけられおまへく不意に秋味方とつらまてより必承と引去成るるちくま
幸朋友の既をさるたるに似くはてはてはそ加なく先ん就申け誠今の如く食
改にさまはも城中羊穀多くびたといひ何ヶ月田まはも根をさるて有極く
ひも今まかの花科と所先あるさくたにひら頭を伸く隊人に承さべく
いたひら今う骨城に大狐かけひし其時十方より所務とせらまはらさの所
もとどごまはも官易城いさくひとお國の刑限はくまさくやんひ
をいられおまへあらは城申にひらう忠の志あまうとあひ居たる物さるまは
ほびまらち奉安法の所教書とるしあ功あは恩赦をゆはやまこのよ妻
細中合く使を返りく城中ひすはは遣りたりとほび大おをため士卒ま
をさ付とらまらすく赤符と付てお國の項ひもりし一六陣とほびくはをを
たり十方の奇もあまはらるくさや城にひはかけらるへ餘波を合せよと教方
軍勢をくは開をゆるかけ四方の圍をゆるさも捕りたり開を城扉とより

つらけられおまへく不意に秋味方とつらまてより必承と引去成るるちくま
幸朋友の既をさるたるに似くはてはてはそ加なく先ん就申け誠今の如く食
改にさまはも城中羊穀多くびたといひ何ヶ月田まはも根をさるて有極く
ひも今まかの花科と所先あるさくたにひら頭を伸く隊人に承さべく
いたひら今う骨城に大狐かけひし其時十方より所務とせらまはらさの所
もとどごまはも官易城いさくひとお國の刑限はくまさくやんひ
をいられおまへあらは城申にひらう忠の志あまうとあひ居たる物さるまは
ほびまらち奉安法の所教書とるしあ功あは恩赦をゆはやまこのよ妻
細中合く使を返りく城中ひすはは遣りたりとほび大おをため士卒ま
をさ付とらまらすく赤符と付てお國の項ひもりし一六陣とほびくはをを
たり十方の奇もあまはらるくさや城にひはかけらるへ餘波を合せよと教方
軍勢をくは開をゆるかけ四方の圍をゆるさも捕りたり開を城扉とより

秀御針將門館親相



秀郷の門の相成るん
 とく 態と 脇中にあり
 業内 一々れお門あり
 冠を 掲げ 白に
 こい けし 振おん
 秀郷 おれを かく 大
 り 思ふ に われと

と云はれぬ門の徳基王を打渡さるるも箕田城居るの後國中の兵一人も遣は
し居ざりしと云ふ事ありしに其に改よるべしと評定されしに間敷日吉
軍に人をもたれぬ其と今年例も法を起しし兵も居る様を
やどるうたれぬ中ノ長途難儀なるべし先物圍の味方にも牒し令せ明去
早く改よるべしとありしに月廿日に下総の大内一かつ合身多と雖も宗
徒の一族今度軍とせし事どもに我れ頼に官位とさげし不領と海陸林
身の後いふに及ばぬ其のすに振舞たる我れ其のむこそうとてまて下
野押領使儀を秀卿とらふものあり大獄冠より七世の孫内守村雄の
嫡男にさるるの巻をいさく前第一族度より九東國に肩負りし事
もつらりたりわす村秀卿つとぐと事案でまてなてもお門関八列を改罪
け人氏おぞめりしに属し南時官方とく僅に箕田の一族ありしが是を
居る徳基あは瓜うりて免るべきが館に切向く喜徳の相ありや否伺ひん
前ノ五十四

と云ひもの先契に出立せ下総に歩城す門外より使を遣し秀卿不肖の
才ありしとも幕下に列し忠節と抽し敬するのる末上のうといひしを
お門入にせし秀卿を客位に請はる折し例の妓女に髪梳せ居たり
し其儀の條に礼髪とも儲け大童に烏帽子冠し周章強く走りかき對面
せ言ふの洞くく退後とせしべとてまて事將忽とせんえにたるも
秀卿をもちておんとも種々の存胎とてゆへゆへのるはとほくまは
お門が客々津料膝の上には敷敷とて惠惠の袖はく振振し其ありし
て人々の体にあはかしく秀卿膝をもち下申にゆり爪強とて中々へん
圓にまたる人をもと手に儀はたりし時に温くく寛仁大方の美にあは
いして人をもたると瓜ぬんお門が髪梳りたるも青よりゆる大津巻たに
絶し初めとも弓矢の名は居る事おとてりし大眼人といふものあり
と介に内儀合辨の相とありし事とて内儀に忠義善心の義とてとんで

初対面はつたいめんより公替こうかへ王おうをを使つかのの下げ向むかああららむむくく珠たま罫ばとと一いっ重じゆうがが首くび我われ
おおのの内うちへへ使つかのの兵へいとと僅わずかくくああ

前々平記圖會卷之一終

前々平記

